

教科書が出版された意義は大きい。私がアジア経済論を教えることがあれば、この『現代東アジア経済論』を採用することを最後に付け加えておきたい。

(阿部茂行・震災記念21世紀研究機構／同志社大学名誉教授)

塩崎悠輝、『国家と対峙するイスラーム——マレーシアにおけるイスラーム法学の展開』作品社、2016、342p.

ウラマー（イスラーム学者）とは、シャリーア（アッラーの教え）に関する学問を習得してムスリム社会で継承してきた人々である。ウラマーは師弟関係や留学を通じて地域を超えてシャリーアを継承してきた。本書は、中東からシャリーアの知識を持ち帰ったマレーシア／マレー世界¹⁾のウラマーたちがシャリーアに従う社会を実現しようとして苦闘する様子を描こうとするものである。

本書の構成は以下の通りである。

- 序 章 なぜウラマーは国家と対峙するに至ったのか？
- 第1章 東南アジアにおけるイスラーム法解釈の発展とファトワー
- 第2章 中東と東南アジアをつないだウラマーのネットワーク
- 第3章 東南アジアにおける近代国家の成立とイスラーム法
- 第4章 ムスリム社会における公共圏の形成とファトワー
- 第5章 マレーシアのウラマーとファトワー管理制度
- 第6章 マレーシア・イスラーム党（PAS）と近代国家マレーシアの対峙

序章をもとに本書の意義を整理しておこう。

シャリーアを現実社会で実現するには妥協や屈服を強いられることが多く、とりわけイスラームの教義で想定されていない近代国家ではその困難が大きい。植民地化を経た非ヨーロッパ諸国では、

ヨーロッパから移植された法システムとシャリーアのどちらを優先するか（あるいは両者を折衷すべきか）という問題が現在も決着していない。

この点に関連してマレーシアは際立った事例を提供する。マレーシアは、ムスリムが国民の多数を占め、イスラームが社会で重要な役割を果たしているながら、近代化と経済成長が進むとともにウラマー層とイスラーム運動が拡大してきたという意味でムスリム諸国でも近代化の成功事例であり、それゆえにイスラームと近代国家の対立が喫緊の課題となっている。

また、マレーシアは、ウラマーが政党に結集し、野党として議会制民主主義の枠内で政府と対峙する道を選んだ点もムスリム諸国で珍しい事例である。国民の3割程度を非ムスリムが占めることから近代社会を無視したイスラーム的社会的実現という選択肢は考えにくく、そのためウラマーは近代国家との対峙を真剣に考えることを迫られる。

本書が取り上げるファトワー（教義回答）とは、シャリーアに関する質問に対してウラマーが出した回答のことである。多くのムスリム諸国において、ファトワーとは政府から独立した集団としてのウラマーがムスリム社会に働きかける手段である。マレーシアでは、ウラマーの多くがマレーシア・イスラーム党（PAS）に結集して国政における野党として政府に対抗し、ファトワーを通じて政府のイスラームの正当性を問題にした。これに対して政府は法制度を整備してファトワーを統制した。各州の統治者が「イスラームの首長」としてファトワー公告における最終的な権限を与えられ、また、公的に布告されたファトワーに反する言動に対する罰則が定められ、ムスリムは（ウラマーを含めて）官報で布告されたファトワーに従わねばならない拘束性を持つ点で、マレーシアは他のムスリム諸国と比べて異例である。

ムスリム諸国の中でも際立った事例を提供するマレーシアの事例を検討することで、イスラームと近代国家のあり方について多様な当事者や関係者に受け入れられる道を模索しようとする著者の問題意識が強くうかがえる。

本書の内容を章ごとに簡単に紹介する。

第1章はマレーシアにおけるファトワーの発展

1) 本書はマレーシア国家の成立以前もマレーシアと呼んでいるが、本稿ではマレー世界と呼ぶ。

を概観する。ファトワーはイスラーム学の体系のみに依拠した解釈から発せられるのではなく、時代ごとの政治・社会環境との関係の中で、ときに動揺しながら発せられる。20世紀に至るまでマレーシアで最も参照されたファトワー集はシャーフィイー派の大ファトワー集だったが、20世紀に入ると新聞や雑誌でファトワーを公表する形式が生まれ、20世紀後半にはラジオやテレビ、さらにインターネットなどのメディアが登場した。

第2章では、20世紀前半のファトワーをもとに、当時のマレー世界のムスリムが抱えていた課題を紹介する。植民地統治に伴って外来者の移住がもたらされたことや、不動産が酒や豚の販売に使われる場合には賃貸を禁じるという規定が都市部で顧みられなくなっていたことがうかがえる。また、第2章ではマレー世界における法学上の方法論の流行がシャーフィイー派からサラフィー的な方法へ移っていった状況も概観される。マレー世界では19世紀までシャーフィイー派が主流だったが、1906年の『アル・イマーム』の発刊以降サラフィー派が広まり、20世紀前半にはカウム・トゥア（守旧派）と呼ばれるシャーフィイー派とカウム・ムダ（改革派）と呼ばれるサラフィー派が競合していた。1924年のマッカ占領とサウディ・アラビア王国再建を契機にサラフィー的方法論が優位になった。

第3章はマレーシアにおける民族とイスラームの関係を扱う。宗教と民族が概ね対応している多民族社会マレーシアでは、イスラームは多数派民族であるマレー人の民族アイデンティティと結び付けられ、その文脈において政府が「イスラーム化」政策を進めてきた。

第4章はマレーシアにおけるメディアとファトワーの関係を扱う。主要マスメディアが政府の管理下にあるマレーシアで、在野のウラマーは発言の機会に限られるが、教育、モスク、チェラマ（法話）などのイスラーム的な開かれた討議の空間が利用されてきた。これらの討議は対面して口頭で行われるために聴衆に親近感を与え、録音の流通を通じて直接対面しない人にも伝えられた。

第5章はマレーシアの現代史をイスラームの観点から概観する。マレーシアの「ファトワー管理

制度」の発展を3つの時期に分け、かつて国境を越えて参照されていたファトワーが国内で完結していく様子も紹介されるが、特に興味深いのは在野ウラマーが求める「イスラーム化」を骨抜きにしようとする政府の対応がかえって社会のイスラーム化を進めている様子の記述である。政府は1970年代以降にウラマーを行政機関や公立教育機関に雇用し、これによりウラマーの精神的・道徳的な権威を低下させた。中東で学んだマレーシア人学生から政府に批判的な思想的・政治的影響が持ち込まれるのを防ぐため、政府は国内にイスラーム高等教育機関を作り、さらにその卒業生への雇用機会提供のために公立学校でのイスラーム教育を充実させた。これにより野党の影響が強い民間の宗教学校で学ぶ児童が減ることが期待されたが、公立学校でのイスラーム教育の充実、結果として社会のイスラーム化を進めることにもなった。

第6章では、野党のウラマーが政府与党に対峙する事例を紹介する。1980年代以降にアメリカ留学経験のあるムスリムがPASに加入し、また、ウラマーが与党・統一マレー人国民機構（UMNO）に加入するようになり、PASとUMNOの違いは小さくなった。ただしファトワーをめぐるPASと国家は潜在的な対立関係にあり、1982年にPASの指導部の一員でウラマーのハディ・アワンが「UMNOはカーフィル（不信仰者）である」と宣言した。また、1985年にPAS党員と治安部隊の間で武力衝突事件が生じ、射殺されたPAS党員を叛徒とするというファトワーが出されると、PASのウラマーはこれを公然と批判した。

結論ではこれらの議論を受けて、ウラマーは野党だけでなく行政機関にもネットワークを持ち、野党から政府に圧力をかけつつ政府内でも働きかけてアジェンダを実現していると論じる。ただし、野党から政府に圧力をかけている事例は第6章で示されているものの、行政機関に入ったウラマーが政府内で働きかけている様子は十分に論じられていない。「国家とウラマー」と語られていることの多くは与野党の対立であり、与野党を含めたウラマーが国家とどう対峙しているかはわからなかった。

*

本書はマレー世界の現代史を「裏側」から読み解いてみせたいへんスリリングな書物である。マレー・ナショナリズム研究の古典であるウィリアム・ロフの『マレー・ナショナリズムの諸起源』[Roff 1994]は、20世紀に登場したカウム・ムダがカウム・トゥアに対抗し、新聞・雑誌の刊行を通じて勢力を拡大していったと論じた。ロフは20世紀前半のマレー人社会の指導者層を大きく3つに分けて捉え、これらの競合・対立関係を、アラブ系・インド系とマレー人というエスニックな差異や、植民地支配のもとで英語教育を受けたエリート官僚とマレー語教師という言語上の差異によって説明し、この枠組みは今日に至るまで受け入れられている。

これに対し、本書はカウム・ムダとカウム・トゥアの競合をイスラームの学派の違いによって説明する。しかも、ファトワーに目を向けることで、当時のムスリムが新聞・雑誌をファトワー伝達のメディアと受け止めていた可能性が示唆され、新聞・雑誌にロフの研究と違う意味で新たな光を当てるものである。

これは本書の大きな魅力であるとともに問題ともなりうる。本書はマレー世界の現代史研究との接合をあまり意識していない様子であり、既存研究との関係が十分に論じられることなく見解が記される。また、記述の多くは文献資料によって実証されるのではなく著者の観察結果として語られる。このため、本書の記述の多くは、内容の目新しさから関心を引いたとしても、方法の妥当性に照らすと、現在の学術研究の枠組みには馴染まないと言わざるを得ない。

ただし、シャリーアが師弟関係や留学を通じて個人的に伝えられてきたことや、それを西洋近代に由来する諸制度に載せようとして齟齬が生じている現状に対して、文献資料に記されていないにもかかわらず存在することがらに積極的に目を向けようとする著者の意図を汲み取るならば、口承により社会に受け継がれて常識となっていることがらを抽出して記述することも学術研究の成果として認められるべきとなろう。しかも、本書が論じるように、国境を越えて参照されていたファトワーの参照範

囲がマレーシア国内に限定されていき、しかも公的なファトワーのみがウラマーを含めた全てのムスリムに等しく法的拘束力を持っていく過程は、ファトワーで何がどのように語られているかということとあわせて考えるならば、マレー・ナショナリズムと密接に関わる問題である。後世から振り返ったとき、本書がロフ以来のマレー・ナショナリズム研究をすっかり塗り替える歴史叙述と方法論の立ち上がりの画期を成した研究として評価される可能性を秘めていることは否定できない。

ただし、そのことを無批判に受け入れてしまえば、どこまでが文献資料等で再調査可能で、どこからが観察等に基づくものかという区分が曖昧になりかねない。事実、本書には、以下のように、それ自体が本書と同じかそれ以上の分量の記述によって論証されるべきと思われる主張がいくつも登場する。例えば、マレーシアで武力行使やテロ活動が少ないのは、イスラーム運動とその政策の一部が与党が取り込んでいることと、議会政党であるPASに急進派も含めてイスラーム運動の諸勢力が結集していることのためであること(第3章)。マレーシアのウラマーは与党と野党に分かれても相互の連絡は緊密であること(第4章)。20世紀半ば以降のマレーシアにおける公的なファトワーには、文献に依拠することなく「公共の福利」のみを根拠として法的判断がなされるケースが非常に多いこと(第6章)。

このことと関連して、本書は既存研究として中東と東南アジアをつなぐウラマーのネットワークに関する研究やマレーシアにおけるファトワーの研究を挙げているが、マレーシアの社会に関する研究はほとんど挙げられていないか、その内容が十分に検討されていない。例えば多和田裕司は、カウム・トゥアとカウム・ムダの関係について文献研究と異なる見地から検討を加え、文献資料だけに依拠するのではない方法論について議論している[多和田2005]。幅広い既存研究を踏まえて方法論を精緻化していくことで、本書が一次資料としてでなく二次資料として意義を持つ研究に発展していくことに期待したい。

(山本博之・京都大学東南アジア地域研究研究所)

参考文献

- Roff, William R. 1994. *The Origins of Malay Nationalism*. 2nd ed. Kuala Lumpur: Oxford University Press. (first published by Yale University Press, New Haven and London, 1967.)
- 多和田裕司. 2005. 『マレー・イスラームの人類学』
京都：ナカニシヤ出版.

徐如林. 『連峰縦走——楊南郡の傳奇一生』
晨星出版, 2017, 269p.

本書（中国語での執筆）は台湾原住民族の研究において大きな功績を残した楊南郡氏の波乱に満ちた人生を、楊氏の他界直後に楊氏の妻、徐如林氏が記したものである。本書は著者による前書きから始まり、楊氏の人生を描いた本編の後には、著者による後書きが添えられる。さらに付録には、楊氏の他界後に新聞や雑誌に寄稿された追悼記事3篇のほか楊氏の年表並びに著作表が付されている。また楊氏の人生のそれぞれの場面を象徴する写真も多く挿入されている。

楊氏の人柄や研究については『幻の人類学者森丑之助——台湾原住民の研究に捧げた生涯』[楊2005]に寄せられた宮岡真央子氏による叙述「時代を隔てた二人の学術探検家——森丑之助と楊南郡」がある。ここでは学術機関に属さず独自に台湾原住民族の村々を渡り歩き奔放かつ純朴な目線で当時の台湾原住民族をありのままに記録し、その作品の価値が新たに見いだされ始めた森丑之助という人物と、楊氏との類似点を描き出している。

楊氏の人生を物語る本書の特徴は楊氏を最も知る人物、40年以上にわたり楊氏に寄り添った妻——楊氏の登山パートナーでもあり楊氏の山岳道とその歴史に関する著作の共同執筆者でもある——徐如林氏の手によるものであるという点にある。楊氏の最良のパートナーであった徐氏にしか記述できない詳細さで楊氏を浮き彫りにしている。楊氏の著作は生前、登山愛好家、台湾文化史愛好家に親しまれ、多くのファンが慕っていたということであるが、本書は生前の楊氏を知らない読者にとっては楊氏への最良の入門書だろう。特に台

湾原住民族の言語・文化史などを研究する者にとって興味深い一書になるはずである。この分野の研究に就くにあたり、楊氏の著作を見逃すことはできない。

楊氏の生い立ちから始まり晩年にいたるまでの一生はまさに起伏に富んでおり、楊氏の人生を通して、日本統治時代、国民党時代、そして現在にいたるまで常に変化にさらされてきた台湾の近代史が垣間見える。徐氏の描く楊氏の生きざまをここでは簡潔に紹介する。

楊氏は日本統治時代の1931年、台南においてシラヤ族の集落に生を受ける。17世紀、台湾西南部がオランダに統治された時代（1624-61）においてシラヤ族は台南一帯の平地に暮らしていた種族であるが、時代が鄭成功統治（1661-83）、清朝統治（1684-1895）と移るにつれ漢民族移民の圧迫を受け、土地の痩せた山地へと退き、固有の言語（シラヤ語）も徐々に失っていった。楊氏の祖父の時代も移住地を求めて転々としていたということである。楊氏の家系はシラヤ族の中でも、オランダ時代とそれに続く鄭成功時代を通じて最も開花した集落であった新港社[林田2010: 65]の末裔である。シラヤ語は日本統治時代に入るとほぼ消滅した言語となっていた[Tsuchida and Yamada 1991]。しかし本書に興味深い記述がある。楊氏の幼少期、楊氏の父のもとには、シラヤ族集落の各地から知人が訪問しに来ていたとのことであり、楊氏はそれらの人々が知らない言語を話すことを訝しく思い、母に問い詰めたということである。このころシラヤ族が日常的に用いる言語は閩南語に変わっていた。もちろん楊氏の第一言語も閩南語であったはずで、楊氏が耳にした知らない言語とは、年配者のみの間でわずかに記憶され、同族同士が集まる限られた場面で使われるのみになったシラヤ語である。また、この日本時代の台湾に生まれ初等教育を受けた楊氏はもちろん日本語にも堪能である。13歳で少年労働者として日本に渡りゼロ戦を造る工場で終戦まで1年余り働いた。台湾に戻ってからは就学しなおしたが、これまで用いていた日本語は不要になり、新たに中国語を取得しなければならなくなった。高校時代には勉学に一念発起し台湾大学外国文学部に合格する。そのため楊